

キャリア教育としての「書く」力の育成

－「国語」教育との連携を目指して－

千 古 利 恵 子 中 條 敦 仁

大学生の論理的に書く能力は低く、その能力開発が急務とされ、大学でのキャリア教育の必要性が説かれた。「書く」能力育成には、積み上げ的な訓練が必要で、その育成の場が学校であるが、機能していない。このことを打開するには、論理的思考を1つの柱として、明確な最終到達地点を設定し、その達成に向け各課程が学問的連携を強化する必要がある、その方法として、高校・大学で同一教材を使用するということが有効といえる。

キーワード：キャリア教育、高大連携、国語、文章表現、論理

はじめに

社会人に必要な基礎的能力である論理力、文章表現力、コミュニケーション能力のような「〇〇力」といわれるものは、本来、自分の必要に応じて自ら欲し、自ら獲得していくもので、他者から与えられるようなものではなかった。ましてや、大学において、その基礎力養成を目的とした講義が組み込まれ、評価の対象となるものではなかったはずである。しかし、若年層の基礎力低下が叫ばれ、評価し、身に付けさせる対象となってしまったのである。

では、今の若年層に能力がないのかというと、そういうわけではない。ただ、彼らの能力は、仲間内、あるいは、同世代にしか通用しない能力であり、ごく狭い範囲でしか威力を発揮しない能力なのである。彼らは、公的に通用する能力、つまり、今社会から求められている基礎力に欠けているといえるのである。

こういう状況の中、現在の大学教育の社会的使命は、専門分野の教育から社会人としての基礎力の教育へと変化している。18歳人口の減少は、各大学に「入学生の質の低下」に如何に取り組み、社会的評価の維持や向上に努めるべきかという難題を突きつけている。多くの大学が、教育内容の軸足をリメディアル教育、キャリア教育へと移行しているのも致し方ないだろう。

本稿では、「書く」力の育成をキャリア教育として位置づけ、指導に取り組む際に直面する問題点を教科「国語」との関わりから検証し、指導の私案を提示したい。

I

中央教育審議会の大学分科会小委員会が、大学卒業までに学生が最低限身につけなければならない能力「学士力（仮称）」を打ち出した。大学全入時代を控えて、「学士」の質を維持する狙いがある、との見方もなされている。

（1）「学士力」は「知識」「技能」「態度」「創

造的思考力」の4分野13項目からなる。「技能」では、①「コミュニケーション能力」としての、社会生活を送る際に必要な能力として日本語と特定の外国語で読み、書き、聞き、話す力の習得、②「情報活用能力」としての、インターネットなどの多様な情報を適切に使い、活用できる、③「論理的思考力」としての、情報や知識を分析し、表現できる、ことを求めている。「創造的思考力」では、知識、技能、態度を総合的に活用し、問題を解決することができる、ことを求めている。

上記の素案が提示されたことで、各大学のキャリア教育は拍車がかかり、担当者が指導法を検討する時間的余裕は失われていくことになる。だが、指導に先駆け

- ①「コミュニケーション能力」と「読み、書き、聞き、話す力」がどう関わるのか
- ③「論理的思考力」と「分析し、表現できる」能力がどう関わるのか

については、検証するべきだろう。なぜなら、「読み、書き、聞き、話す力」「表現」ときけば、安易に「国語力」と結びつけ、教科「国語」の指導内容に重ねようとするために、人的・時間的な問題の解決が困難になっていると感じているからだ。だからといって、国語力は総ての学習の基礎力である、という考えを全否定するわけではない。「文章表現能力」「コミュニケーション能力」の育成を国語教育の範疇と受け止める声が依然あることも事実だ。国語教育の範疇であるか否かは別として、そのような認識が未だ消えないところに、国語教育に対する期待と失望が感じられる。中学・高校・短大・大学・専門学校の教壇にたち、主に国語教育に関わってきた筆者自身の思いも、まさにそれである。教科「国語」は、小学校課程から、学校教育で最も多くの

授業時間が割り当てられながら、なぜこのような状況から抜け出せないのだろう。文部科学省は、児童・生徒の発達段階に応じ、教科「国語」の指導目標を、以下の通り定めている。

小 学 校：国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。

中 学 校：国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を養い言語感覚を豊かにし、国語に対する認識を深め国語を尊重する態度を育てる。

高等学校：国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力を伸ばし心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

（「国語」指導要領より掲出）

国語教育は、小・中・高の別を問わず、言語能力の習得を教育目標に据えていることは、以上のとおり明確であるが、ことばの教育は幼稚園教育からすでに行われることを忘れてはならない。幼稚園教育要領には、「言葉」の教育のねらい・内容・取り扱いの留意事項が、以下の通り記されている。

言葉…経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育

て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。

(「幼稚園教育要領」より掲出)

改めて言うことは躊躇われるが、高等教育機関のカリキュラムには、高校まで取り組んできた国語教育や言語教育は設置されていない。教員養成の学部や学科では、教科「国語」の指導内容や指導法を学ぶカリキュラムはあるが、学生自身の国語力アップをねらいとする科目は設定されてこなかった。その必要を感じなかった時代も勿論あったのだろう。だが、必要性に気付きながらも、大学側のためらいが多いためか、日本語の習得を目指す言語能力育成の科目は設けられてこなかったように思う。社会も専門分野の教育を受ける機関として、高等教育機関への進学を意味づけていたことも、日本語の言語教育に取り組まなかった理由の1つだろう。近年、その認識が崩れているばかりか、大学は高等学校までに習得出来ていない言語の基礎力ー外国語・日本語を問わずーの完成を行う教育機関とさえ位置づけ始めているようだ。学生の実態と社会の要請を感じながら、高等教育機関のカリキュラムと高等学校の国語教育とを関連づけるには、あまりにも課題が多い。具体例は後述するが、問題点を集約すれば、次のようになるだろう。

1、教科書から専門書への飛躍

大学教員は、担当科目ごとに、その分野に適した研究書や教養書などをテキストとして選定する。その結果、専門性が高い科目であればあるほど、高等学校で使用している教科書や副教材の内容に配慮することはない。いや、できないというべきだろう。

高等学校までの授業では、文部科学省の検定を受けた教科書が使われる。主たる教材として設定された教科書に収録された作品（特に文学作品群）は、人間の情緒面に訴える要素が重視されがちで、客観的・論理的な言語表現例にはなりにくい。

2、入試対策から教養教育への転換

大学全入時代が目前とはいえ、高等学校では相変わらず、生徒の進学希望に合わせた受験勉強から離れられない。頻出漢字や語彙の暗記、選択肢解答テクニック習得を重視した長文読解の熟練生に、教養を身につけなければ一人前の社会人にはなれない、などと説いても、響かない。入学試験対策から就職試験対策への名称変更に陥りやすく、教養教育からは遠のいていく。

上記の問題は、高等教育機関のカリキュラムと国語教育との連携に限ったことではないだろう。高等学校は、各校ともその独自性を維持するに相応しい教科書を、多くの検定教科書から選定する。大学側にとって、入学生が使用した教科書や副教材を調査し、学習内容を確認することの必要性は感じながらも、その作業は実施不可能である。結果として、選定したテキストなどが、自身の担当科目の受講生の基礎知識とかけ離れてしまうのである。高等学校での学習内容と関連性をもつテキストの選択は想像以上に難しい。より専門性の高いテキストを選定すれば、受講生はそのテキスト内容に関して全員が白紙状態となり、公平な学習状況を設定できる、ともいえる。学習効果を考えるなら、問題は多いのだが。

キャリア教育は、一人前の社会人に育てる

ための教養教育として位置づける傾向が強いだろう。当然、社会が求める「教養」とは何か、という議論が、各教育機関でもなされるのだろうが、「教養」の実像は掴みにくい。社会変化が緩やかな時代なら、一般人が共通認識をもつことは可能であったろうが、現代のように激しく変動すると、固定した「教養」など存在しないかもしれない。変動し続ける社会が必要とする「教養」の習得が困難であるために、かえって不変の知識の習得は容易く感じられるのだろう。大学生の多くが、就職試験対策に名称変更した受験勉強に対して、拒絶反応を示さず取り組めるのは、高等学校までの学習法こそが、かれらが承認する「学ぶ」方法だからかもしれない。そこには、幼稚園教育から習得に取り組んだ自分なりの言葉で表現する姿や高等学校卒業時には思考力や想像力を養い終えた姿や、さらに思考力を伸ばした姿は見いだしにくい。他者にそれを伝えるかは別としても、自身が感じた疑問や課題を自分なりの言葉で表現し、その実体を捉えようとした時から、「思考」は開始されている。思考力が欠如していると感じるのは、われわれ大人が、疑問や課題の実体を把握する思考作業が継続している状態の生徒や学生に出会っていないからだろう。

従って、キャリア教育には、「思考」を継続させるための「言葉表現能力」育成メニューの開発が、最優先されるべきだろう。

II

大学のキャリア教育の目的は何か、という検証が十分なされていないにしても、各高等教育機関は、おそらく「YES-PROGRAM(若年者就職基礎能力支援事業)」に示されたもの

と、中央教育審議会の大学分科会小委員会の示した「学士力」即ち「知識」「技能」「態度」「創造的思考」の4観点から、各校独自のキャリア教育内容を構成し、実施してゆくのだろう。実施する教育の効率化をはかるには、高等学校で行われているキャリア教育を知る必要がある。

文部科学省は平成15年6月、高等学校卒業者の約半数が大学進学、約2割が専門学校に進学、2割近くが就職し、1割近くが進学も就職もしないという状況をふまえ、教育・雇用・産業政策の連携強化等による総合的な人材対策として取りまとめた「若者自立・挑戦プラン」を、平成18年1月には『若者の自立・挑戦のためのアクションプラン』を立ち上げている。平成18年11月には「高等学校におけるキャリア教育の推進に関する調査研究協力者会議報告書ー普通科におけるキャリア教育の推進ー」を公表し、初等中等教育におけるキャリア教育の在り方について、指針を出している。この報告書には、「キャリア教育の推進のための方策」(第2章)が示され、さらに「組織的、体系的なキャリア教育の指導計画の作成(学校)」として「特別活動や総合的な学習の時間、教科・科目等と関連付け、学校のすべての教育活動を通じた組織的、体系的なキャリア教育がなされるよう各教科等の指導計画の作成に当たって配慮することが必要」との提言がある。この報告書にも注目しながら、高等学校が取り組むキャリア教育を考えてみたい。

周知のとおり、高等学校では教科を横断する学習として「総合的学習」時間が設けられ、多くの学校現場で実践されている。以下に示した役割モデルは、あえて各教科の学習という制限を設け、その範囲で実施可能な役割を、

大学のキャリア教育との連携という視点から
模索したものである。

キャリア教育につなげるための高等学校における各教科の役割モデル

| | |
|-----|---|
| 英 語 | <ul style="list-style-type: none"> ・英語基礎会話能力を養う ・外国文学、外国文化を知り、文化、風習、習慣の違いを乗り越えて、国際的に活躍するための基礎力を養う ・国際的感覚を養う ・客観的視点を養う |
| 数 学 | <ul style="list-style-type: none"> ・公式にのっとって解答を導き出すことにより、論理的思考を養う ・数学の定理を学び、多くの定理が周囲に応用されていることを知る ・数的処理法を学ぶ ・客観的視点を養う |
| 理 科 | <ul style="list-style-type: none"> ・周囲にある理科的現象を、論理的に説明し、新たなこと創造するための発想力、思考力を身に付ける ・我々の生きる世界は、多くの生物や植物から成り立ち、人間もその一部に過ぎないことを認識し、環境に配慮した生き方（ＥＣＯの観点）の必要性を知る |
| 社 会 | <ul style="list-style-type: none"> ・日本にとどまらず、世界に目を向け、歴史を横断的にとらえて、日本文化、外国文化をとらえ、客観的視点に立ってまとめ、日本文化を海外に発信できる能力を養う ・倫理観、公共性を養い、社会人として活躍するための人間力を身に付ける |
| 国 語 | <ul style="list-style-type: none"> ・プレゼンテーション能力を身に付けるために、論理的思考を鍛える ・会話表現力、文章表現力を身に付ける ・漢文に触れ、日本文化に大きな影響を与えた、最も身近な外国であった中国の過去の文化に触れ、中国の文化を中心にアジア圏の文化に興味を持つ ・古文に触れ、日本の伝統文化を知り、その文化を外国へ発信できるだけの基礎知識を習得する |
| 情 報 | <ul style="list-style-type: none"> ・情報機器の基礎的な操作を学ぶ ・将来情報を分析、利用するための基礎となる、情報収集方法を学び、その整理・分析能力を養う |

表中の太字表記が、大学のキャリア教育との連携を図る上で、留意したいことである。初等中等教育機関の教員は、教科を横断する「総合的学習」指導を経験している。高等学

校では、各教科内容が中学校に比べて専門性が強いことから、専門外の教科を横断する指導にあたることは、容易なことではないと推測する。ましてや、国際理解・健康・福祉・

環境・情報の観点へと広がりを持たせるには、社会への関心を高めるための自己研鑽が求められると考える。現在、教員養成課程では、教員免許取得のために「総合演習」の履修が義務付けられており、科目を超えた指導方法を多少なりとも学習した教員も増えてはいるが、総ての教員が、教科横断の指導にあたるノウハウを獲得しているわけではない。この状況の中で、専門性を離れ大学のキャリア教育との連携を進めるには、教員が獲得している指導上の共通能力を活用するしか方法はないだろう。教員の基本的な能力とは、「客観的視点」に立ちながら「情報収集」し、それらを「整理・分析」し、「論理的思考」を重ね、自らの言葉で「会話」し「文章表現」する能力である。この共通項を教科の役割にしよう、というのが第一の私案である。第二の私案は、教科「国語」の指導内容と大学のキャリア教育とを円滑に連携させるための試みである。

Ⅲ

大学現場では、人間関係を構築できない学生、免許・資格取得の実習記録が書けない学生、人前で発言ができない学生が増えている。しかし、彼らは、高等学校での学習が不十分だったわけではない。国語が好きで、学習評価も高いが「文章表現力」の低い学生たちも多いのである。このような学生には、

- ①「コミュニケーション能力」と「読み、書き、聞き、話す力」との合体
- ③「論理的思考力」と「分析し、表現できる」能力の合体

の訓練が必要である。その思いを強くさせたのは、Benesse教育研究開発センターが実施した「第4回 学習基本調査・国内調査 高校

生版」である。特に、次の項目は、高大連携のキャリア教育内容を検討する上で注意を払いたないので、報告書⁽²⁾から抜粋し、掲出する。

第4回 学習基本調査・国内調査 高校生版

調査時期：2006年6月～7月

調査対象：全国4地域（東京都内・および東北、四国、九州の都市部と郡部）の普通科高校2年生

調査報告書の目次・詳細：調査概要 序章

第1章 学習基本調査からみえること

調査の結果からみえること

第2章 高校生の学習に関する意識調査・実態

第1節 高校生の学習行動

第2節 高校生の学習観・成績観・社会観

〔報告書からの抜粋A〕

Q. 次にあげる学校の勉強方法はどのくらい好きですか

・個人で何かを考えたり調べたりする授業

- 1. とても好き (10.9)
- 2. 好き (31.5)
- 3. 好きでない (37.3)
- 4. ぜんぜん好きでない (14.0)
- 5. やってない (0.2)

無回答・不明 (0.2)

・グループで何かを考えたり調べたりする授業

- 1. とても好き (15.4)
- 2. 好き (33.5)
- 3. 好きでない (29.0)
- 4. ぜんぜん好きでない (12.2)
- 5. やってない (9.3)

無回答・不明 (0.6)

・自分たちでテーマや調べ方を決めてする方法

1. とても好き (7.8)
 2. 好き (22.0)
 3. 好きでない (36.2)
 4. ぜんぜん好きでない (18.1)
 5. やってない (15.1)
- 無回答・不明 (0.3)

・学校外のいろいろな場所に行つてする授業や調査

1. とても好き (23.4)
 2. 好き (28.1)
 3. 好きでない (17.1)
 4. ぜんぜん好きでない (7.6)
 5. やってない (23.4)
- 無回答・不明 (0.3)

・いろいろな人に聞きに行つてする授業や調査

1. とても好き (7.4)
 2. 好き (19.4)
 3. 好きでない (30.6)
 4. ぜんぜん好きでない (12.0)
 5. やってない (30.3)
- 無回答・不明 (0.3)

・友だちと話し合いながら進めていく授業

1. とても好き (21.1)
 2. 好き (39.6)
 3. 好きでない (20.4)
 4. ぜんぜん好きでない (6.6)
 5. やってない (12.1)
- 無回答・不明 (0.3)

・考えたり調べたりしたことをいろいろ工夫して発表すること

1. とても好き (6.5)
2. 好き (18.5)
3. 好きでない (39.2)

4. ぜんぜん好きでない (22.8)
 5. やってない (12.6)
- 無回答・不明 (0.4)

[報告書からの抜粋B]

Q. あなたは勉強していて、次のように感じるがありますか

・国語の教科書を読んでいて、登場人物や書いてある内容に興味をわいてくる

1. よくある (23.4)
 2. 時々ある (39.0)
 3. あまりない (27.2)
 4. ぜんぜんない (10.1)
- 無回答・不明 (0.3)

・自分や相手の気持ち・考えをうまく出し合えたらいいと思う

1. よくある (37.2)
 2. 時々ある (36.9)
 3. あまりない (19.3)
 4. ぜんぜんない (6.2)
- 無回答・不明 (0.4)

Q. ふだん(学校の授業や宿題以外で)次のことをどのくらいしますか

・文学作品や小説・物語を読む

1. よくする (23.3)
 2. 時々する (29.4)
 3. あまりしない (19.9)
 4. ほとんどしない (27.2)
- 無回答・不明 (0.3)

・新聞のニュースを読む

1. よくする (15.6)
 2. 時々する (32.9)
 3. あまりしない (25.2)
 4. ほとんどしない (26.0)
- 無回答・不明 (0.3)

[報告書からの抜粋A]から、現代の高校生は調べ学習が好きなことが分かる。しかし、それは仲間内や個人的な範囲での作業や情報交換・収集に限られ、社会との交渉は敬遠する傾向にある。自ら取り組む課題を発見・設定し、解決法を工夫することは好まない傾向が強く、消極的で閉鎖的な学習態度であるといえよう。頻出漢字や語彙の暗記、選択肢解答練習には、確かに社会との交流は必要ではない。ここに、言語表現能力を育てるうえでの課題があるといえる。

[報告書からの抜粋B]から、国語の教科書に収録されている教材への関心の低さが確認できる。文学作品や小説・物語を読まないことが、人生への関心の低さにつながるという言い難く、新聞のニュースに目を向けないことが社会への関心のなさにつながることも断言できない。携帯小説を好んで読む児童や生徒がふえていることから、活字離れが進んでいるとも言い切れない。だからと言って、他者への理解や関心が復活しているとか、現代社会を客観的にみようとする姿勢がみえるとか、これも決めがたいところである。国語の教科書を片手に人生を思考させようとしても、彼らとの距離は広がるばかりだ、とはいえよう。そのような状況を招くことの多い教材を使い、キャリア教育への連携を視野に置いた「書く」指導は無謀かもしれない。しかし、多種多様なカリキュラムで学習してきた高校生を受け入れる大学は、在学生の共通テキストである教科書活用法を考えるべきではないか。次に「国語」教科書活用の一例を示してみる。

* 具体案①

韻文を活用し、感覚的表現と論理的表現の違いを知る 一 齋藤茂吉の短歌を例として一

元来、短歌は論理的な言葉の接続がなされていない。むしろ、論理の破綻が情緒的世界を生み出すとさえ考えられている。キーワードを取り巻く複数の言葉を、歌人が独創的に接続させ、その独創的接続を評価する言語表現であるともいえよう。単語羅列型の表現に長けた若者がもてあますほど、論理性の欠落した表現法である。高校においては、短歌の感覚的表現に触れ、感性を磨くことを目標とする。

大学においては、この我が国の伝統的な言語接続の良さを学ぶための教材を使い、感覚的表現を分析し論理的に解釈する力を養うことを目標とする。論の通る文章を「書く」教材に使うという試みである。

のど赤き玄鳥^{つばくらめ}ふたつ^{や はり}屋梁^{たちね}にゐて
足乳根^{たちね}の母は死にたまふなり

(齋藤茂吉)

高校生に課す「書く」問題なら「この短歌を読んで100字程度感想文を書け」となるが、大学生に課すキャリア教育の一環としての問題の場合は、次のようなことが考えられる。

[問題例]

- 問1 齋藤茂吉は写実主義を提唱するアラギ派の中心人物であるが、写実主義とはどういうものか。
- 問2 「のど赤き玄鳥ふたつ」と「母は死にたまふなり」とはどのような結びつきが考えられるのか。
- 問3 「母は死にたまふなり」から、感覚的に悲しみが感じられるが、どういう悲しみか。この短歌に対する情報

をできる限り収集し、悲しみの内容を分析しなさい。

問4 人にとって「悲しい」という感情はどのような存在か。

*具体案②

小説を使用し、多角的視点から物事を考える 一芥川龍之介「羅生門」を例として一

芥川の「羅生門」は、高校1年生の国語総合の教科書に掲載され、大学生の多くは、この作品に触れことがあると思われる。通常高校1年生に授業する場合は、「下人に対する人物評価」「下人の行動変化」「下人の心理変化」「(下人の行方は、だれも知らない)以降下人はどうなったのか」など、下人に焦点をあて授業を進めるのが基本である。

しかし、登場人物は下人だけではない。下人の心、行動を大きく変化させたきっかけは「老婆」の存在と言動である。老婆の「生きるためにはしかたがない」という論理には、現代社会の光と影をみてとれる。そこで、大学では、現在の社会状況と照らし合わせながら、この「老婆」の論理とその後の下人の行動をも含めて評価し、老婆の論理の正当性・不当性について意見を書くことを試みることで有効と考えられる。

芥川龍之介「羅生門」

老婆は、見開いていた眼を、いっそう大きくして、じっとその下人の顔を見守った。…(中略)…そののどから、鴉の啼くような声が、あえぎあえぎ、下人の耳へ伝わってきた。

「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、かつらにしようと思うたのじゃ。」

…(中略)… 老婆は、片手に、まだ死骸の

頭からとった長い抜け毛を持ったなり、ひきのつぶやくような声で、口ごもりながら、こんなことを言った。

「なるほどな、死人の髪を抜くということは、なんぼう悪いことかもしれぬ。じゃが、ここにいる死人どもは、皆、そのくらいなことを、されてもいい人間ばかりだぞよ。現に、わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇を四寸ばかりずつに切って干したのを、干し魚だと言うて、太刀帯の陣へ売りに往んだわ。疫病にかかって死ななんだら、今でも売りに往んでいたことであろ。それもよ、この女の売る干し魚は、味がよいと言うて、太刀帯どもが、欠かさず菜料に買っていたそうな。わしは、この女のしたことが悪いとは思うていぬ。せねば、飢え死にをするのじゃて、仕方がなくしたことであろ。されば、今また、わしのしていたことも悪いこととは思わぬぞよ。これとてもやはりせねば、飢え死にをするじゃて、仕方がなくすることじゃわいの。じゃて、その仕方がないことを、よく知っていたこの女は、おおかたわしのすることも大目に見てくれるであろ。」

老婆は、だいたいこんな意味のことを言った。…(中略)…

老婆の話が終わると、下人はあざけるような声で念を押した。そうして、一足前へ出ると、不意に右の手をにきびから離して、老婆の襟髪をつかみながら、噛みつくように、こう言った。

「では、おれが引剥をしようと恨むまいな。おれもそうしなければ、飢え死にをする体なのだ。」

下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎとった。それから、足にしがみつこうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。梯子の口ま

では、わずかに五歩を数えるばかりである。
下人は、剥ぎとった桧皮色の着物をわきにか
かえて、またたくまに急な梯子を夜の底へか
け下りた。

〔問題例〕

- 問1 傍線部は老婆の言動だが、簡単に言
うとどういう論理なのか。
- 問2 波線部は下人の行動であるが、なぜ
このような行動をとったのか。
- 問3 現代社会において、老婆の論理や下
人の行動のような事例はないか。
- 問4 老婆の論理の正当性・不当性につい
てあなたの意見を書きなさい。

Ⅳ

今や、論理的思考力の育成に「書く」こと
が有効な方法の一つであるという考えを否定
する者はいないだろう。しかし、この「書く」
ということが、学校教育の中で積み上げ的に
学習されておらず、特に意見文や論文など論
理的に書くとなると、どうしてもいかわから
ない学生が多く見られる。このことを打開す
るには、論理的思考を1つの柱として、明確
な最終到達地点を設定し、その達成に向け、
保・幼・小・中・高・大の学問的連携を強化
し、各課程で到達目標を明確にする必要があ
る。そのためには、本稿で示した、「同一教材
を使用し、それぞれの到達目標にあわせて読
み、書く」という方法も有効であろう。

論理的に「書く」ことについて、長谷川祥
子氏は、中学校の国語科で行う論理的な作文
指導についての目標をたて、さらに5年間の
実践経験をふまえ、文章表現の技術を次のよ
うに提示している。⁽³⁾

- 目標 1、論理的な文章表現の技術を理解
できる。
- 2、日常生活から問題となる事実を
選ぶことができる。
- 3、論理的な文章表現の技術を使っ
て、記述できる。

- 技術 第1の技術が、論理的な文章構成で
ある。
- 第2の技術が、複数の具体的事象か
らの共通性の発見である。
- 第3の技術が、一つの意味段階に一
つの事柄を記述することである。

上記の目標と技術は、大学でのキャリア教
育としての「書く」能力を育成する際にも注
目したいことである。このように、大学のキャ
リア教育は、高等学校との連携は言うまでも
なく、中学校・小学校との連携までも視野に
入れることで、その教育効果の向上が期待で
きないか、検証する時代を迎えようとしてい
るのかもしれない。中学校・小学校の教科「国
語」との関わりの検証・指導の私案は、稿を
改め報告する予定である。

注

- (1) 読売新聞・朝日新聞（各2007年9月10
日夕刊）
- (2) 第4回学習基本調査
—Benesse教育研究開発センター—
[http://benesse.jp/berd/center/open/
report/gakukihon_6toshi/soku/index.
html](http://benesse.jp/berd/center/open/report/gakukihon_6toshi/soku/index.html) (2007年10月20日)
- (3) 「論理的思考を育成する作文指導(中学
校)の研究」p,73『言語と文芸』118号
(復刊第43号)東京教育大学国語国文学
会編：おうふう（平成13年）所収

参考文献

- ・野矢茂樹著『新版論理トレーニング』
(産業図書2007年1月)
- ・長谷川祥子「論理的思考を育成する作文指導（中学校）の研究」
『言語と文芸』118号（復刊第43号）東京教育大学国語国文学会編：おうふう（平成13年）所収
- ・伊藤洋編著『国語の教科書を考える』
(学文社2001年3月)
- ・高階玲治編『国語科から発展する総合的学習の学力』
(明治図書2001年9月)
- ・アイヴァー・グッドソン、バット・サイクス著『ライフヒストリーの教育学』
(昭和堂2006年5月)
- ・明石要一著『キャリア教育がなぜ必要か—フリーター・ニート問題解決への手がかり—』
(明治図書出版2006年10月)
- ・協同教育研究会編『論作文サブノート』
(協同出版2003年11月)